



最新の系統学研究を反映 多数の新記録種を掲載 日本産鳥類に関する基礎文献

日本鳥学会 100周年記念 「日本鳥類目録」の改訂第7版を刊行します

日本鳥学会では、100周年を記念し、日本鳥学会大会 2012 年度大会（9月14～17日、東京大学弥生キャンパス）にあわせて「日本鳥類目録」改訂第7版を刊行します。

●タカとハヤブサは遠い位置に～最新の研究を反映

近年、DNAを用いた分子系統学的研究が盛んになり、従来の主として形態による分類の学説とは異なった類縁を示す証拠が多く得られるようになりました。今回の改訂ではこれらの結果を取り入れています。たとえば、従来近縁と考えられていたタカ科とハヤブサ科の類縁は遠いと考えられ、目録中で離れたところに置かれています。また、カモ科とキジ科が古くに分岐した仲間と考えられ、目録の先頭に置かれています。さらに、従来はウグイス科として一つのグループになっていた鳥たちは、キクイタダキ科、ウグイス科、ムシクイ科、ズグロムシクイ科、センニュウ科、ヨシキリ科、セッカ科の7科に分けられました。

●100以上の新記録種・亜種を収録

野鳥観察人口の増加や撮影機材の性能向上によって、近年、従来は日本産と考えられていなかった多くの種の渡来が確認されるようになりました。今回の改訂では、論文で報告されたり、識別可能な写真が印刷物に掲載された100以上の新記録種、亜種を掲載しており、自然分布する鳥の掲載種数は、2000年に発行された第6版の18目74科230属542種に対し、24目81科260属633種となりました。



オオタカ（タカ目タカ科）
（撮影：福田篤徳）



ハヤブサ（ハヤブサ目ハヤブサ科）
（撮影：今井光雄）

従来、タカ科とハヤブサ科は近縁と考えられ、タカ目という共通のグループに属すると考えられていましたが、近年の分子系統学的研究の結果、ハヤブサ科はタカ科との類縁は遠く、むしろスズメやカラスなどを含むスズメ目に類縁が近いという証拠が提出されました。今回の改訂ではハヤブサ科はハヤブサ目という独立の目として、スズメ目の直前に置かれています。

鳥類目録

鳥類学が盛んな多くの国では、それぞれの国の鳥学会が、国内で記録されたすべての鳥類を列挙し、それぞれの分類上の位置づけを明かにし、生息状況を記した鳥類目録を出版しています。この鳥類目録はその国の鳥類に関する基礎的文献であり、その分類が、行政や教育、出版などに反映され、市販の図鑑類も多くの場合この目録に準拠して作られます。

「日本鳥類目録」は、1922年に日本鳥学会創立10周年を記念して初版が出版された後、改訂を重ねて、これまでの最新のものは2000年に出版された第6版でした。

日本鳥学会

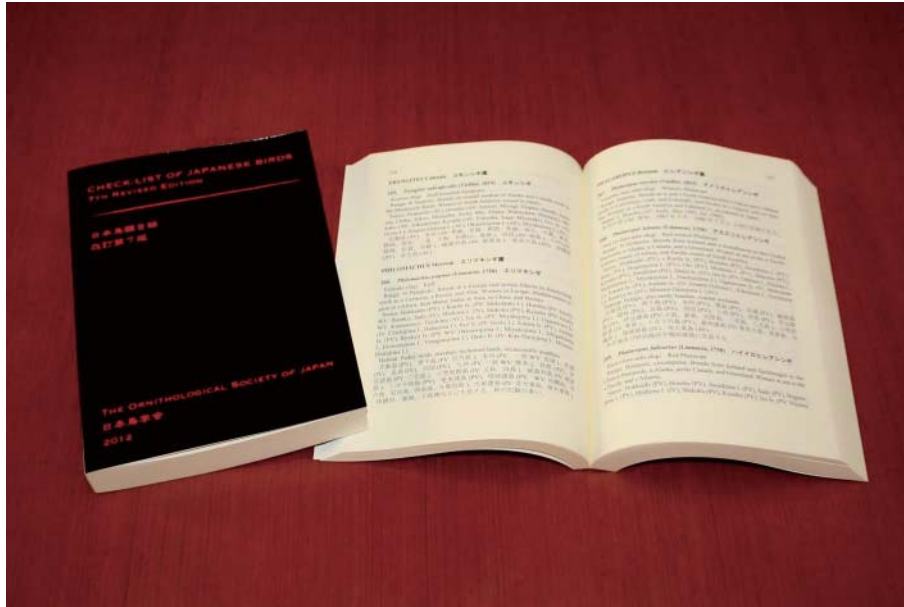
日本鳥学会は日本最大の鳥類学研究者団体です。1912（明治45）年、飯島魁（いじま・いさお）東京帝国大学理科大学（現在の東京大学理学部）教授を初代会頭として発足しました。創立当時の会員数は20名足らずでしたが、現在はプロの研究者からアマチュアまで、約1300名の会員を擁するまでに発展しました。

新規掲載種の中には、2011年にミッドウエイ諸島から新種として記載され、日本国内にも生息することが今年になって論文発表されたオガサワラヒメミズナギドリや、過去の文献を精査して、1833年日本に生息していたことが確かめられたオオハシウミガラスも含まれています。

※「日本鳥類目録」改訂第7版は、日本鳥学会大会2012年度大会（9月14～17日、東京大学弥生キャンパス）会場で9月15日から販売します。大会終了後は、日本鳥学会東京事務所（電話 03-3814-2766）で販売します。

本件についてのお問い合わせ先

（公財）山階鳥類研究所 自然誌研究室：平岡考
電話：04-7182-1101 FAX:04-7182-1106



このたび発行される「日本鳥類目録」改訂第7版。



「日本鳥類目録」の初版（上段左端）からこのたび発行される第7版まで

※このプレスリリースで使用了画像をデジタルデータで提供します。1ページ下段の連絡先にご連絡ください。